

『資本論』の沙翁引用：貨幣の神の如き全能性

福留，久大
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2320108>

出版情報：経済学研究. 85 (5/6), pp.105-126, 2019-03-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

(研究ノート)

『資本論』の沙翁引用

— 貨幣の神の如き全能性 —

福 留 久 大

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 問題の所在と課題限定 | (5) 『資本論』邦訳の作法 |
| (2) 『アテネのタイモン』 | (6) 『経哲草稿』の引用文 |
| (3) 『資本論』のタイモン | (7) ティーク父と娘の翻訳 |
| (4) シェイクスピアの原文 | (8) マルクスとカウツキー |

問題の所在と課題限定

マルクス (Karl Marx, 1818-1883) の名著『資本論』(*Das Kapital*) と初期の作品『1844年の経済学・哲学草稿』(*Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*) に、共にシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) 作の『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*) から、かなり長い引用がなされている。そのドイツ語引用文とシェイクスピア原文を対比するとき、幾つかの不一致が生じている。その不一致が生み出す違和感の根を探ることによって、現行『資本論』の『アテネのタイモン』からの引用が、著者マルクスの手によるものでないことが明らかになる。その探索過程の説明を通して、マルクスの引用文の Text を確定することが本稿の目的である。『アテネのタイモン』からの引用文は、貨幣の機能を巡る興味深い論点を含むが、それらの論及は別の機会に譲らざるを得ない。本稿では、マルクスの引用文に踏み込んで論及するのではなく、その前提として引用文の Text の確定を行うことに主眼を置くことにする。

『アテネのタイモン』

『資本論』に引用されているシェイクスピア関連事項 (シェイクスピア作品の台詞、登場人物、シェイクスピア自身の名前など) は、16件ないし17件に及ぶが、そのなかで『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*) からの引用が最も長い¹⁾。アテネの友人知人の忘恩と裏切りに絶望して森の洞窟に隠棲することになった貴族タイモンが、おそらくは食物を求めて「土よ、何か根をくれ!」と叫びつつ、土を

1) 『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*) という作品名は、小田島雄志訳『アテネのタイモン』(白水社、1983年刊)に依る。坪内逍遙訳では、『アゼンスのタイモン』であり、八木毅訳でも、『アゼンスのタイモン』である。

掘り返して埋蔵金に遭遇する。『資本論』第1巻第3章「貨幣あるいは商品流通」第3節「貨幣」(a)項「蓄蔵貨幣」における『アテネのタイモン』からの引用は、このような場面での台詞である。さらに、『資本論』に先立つこと23年、1844年の『経済学・哲学草稿』においても、同じ場面の台詞と、埋蔵金に関わる別の場面の台詞が、(したがって『資本論』におけるより倍以上の長さの台詞が)、引用されている。そういう事情で知名度の高い引用ゆえに、多方面の論者によって、引用され論述されることになっている。

アテネの富豪の貴族タイモンは、毎日の如く盛大な宴を催して、貴族仲間だけでなく、詩人画家や各種の商人に至るまで金に糸目をつけず歓待した。友人からの急場を凌ぐための借財の求めには貸すのでなく恵むのだと言って気前よく金を与えた。口の悪い皮肉屋の哲学者アペマンタス (Apemantus) は、「こんな宴会や贅沢三昧や虚礼虚飾など何の役に立っていうんだい」と諷めるが、馬耳東風である。忠実な執事フレーヴィアス (Flavius) は、タイモンに家計不如意を訴えるけれど、耳を貸してもらえずに、やむなく諸方からの借金で主人の法外な散財を支えてきた。が、遂に広大な領地もすべて抵当となって、膨大な借金を抱え込み、債権者から返済の矢の請求が飛んでくる日がやってきた。タイモンは、はじめて自分の家計の火の車状態を認識することになる。それでも、当初は「友人という財産がある以上、タイモンの身代に没落があるなどと思うな」と言って、友人仲間の貴族の誰彼に家僕を走らせて借財の申し込みをする。だが、これまでタイモンの恩義を受けた誰もが、言を左右にして金を融通してはくれない。本当の友人は一人もいなかったのである。愕然としたタイモンは、最後に貴族仲間を招き入れ「湯と石」だけの料理を出し、呪いの言葉を浴びせて別離の宴とする。人間不信の挙句、人を呪い、世を呪って、アテネを離れ、森の洞窟に隠れ住むことになる。

前述のように、この場面で『資本論』へ引用される台詞、『経哲草稿』への第一の引用の台詞が登場する。その後、森の洞窟に隠棲するタイモンを、最初に訪れるのは、アテネの元老院と敵対してアテネを離れた武将アルシバイアディーズ (Alcibiades)。彼は、武装して鼓笛手を伴っている。フライニア (Phrynia) とティマンドラ (Timandra)、アルシバイアディーズのふたりの情婦も一緒につき従っている。アルシバイアディーズは「奢れるアテネを攻め滅ぼし廢墟とする」と息巻き、タイモンは、「破壊の限りを尽くすのだぞ、存分に恨みを晴らしたら、おまえ自身も破滅しろ！」と、埋蔵金を軍資金に提供しながら、徹底した人間不信を激白する。フライニア (Phrynia) とティマンドラ (Timandra) にも金貨を与えつつ、「いつまでも淫売でいるよ、淫売ぶりを発揮して誘惑し、病気をうつしてやれ」「梅毒の種をまいて、人間の骨を溶かしてしまえ、そして足腰の立たぬ不能にしてやれ」と唆した挙句に、「ほかのやつらはお前たちの手で、お前たちはこの金で、地獄に墮ちやがれ、みんな野垂れ死にするがいい！」と毒舌の限りを尽くす²⁾。

皮肉屋の哲学者アペマンタスが、次の訪問者だが、相互に人間嫌いの悪罵の応酬が続くのみである。その間に、『経哲草稿』への第二の引用の台詞が、登場する。その後も、三人の山賊、忠実な執事のフ

2) 前掲、小田島訳書、116頁、118頁、119頁。

レーヴィアス、画家と詩人、タイモンのアテネ復帰を求める元老院議員という具合に、洞窟への訪問者が現れる。フリーヴィアスにだけは、「たった一人の正直なやつ、これを持って行け。神々が落ちぶれた俺の手を通してお前に財宝を贈られるのだ。裕福に楽しく生きろよ」と、人間らしい言葉を掛ける。それでも、続けて、「ただし、一つだけ条件がある。人間どもから離れて暮らせ、あらゆる人間を憎み、呪え、誰にも慈悲を掛けるな」と、人間嫌いの本性を隠すわけではなかった³⁾。山賊と画家、詩人はいくばくかの金貨を与えられて追い払われ、元老院議員たちは戯言を浴びせられるだけで、真面目に相手にされないままで引き下がるほかなかった。

最後の場面で、自殺であるのか否か、経緯は不明なままに、タイモンは海辺の波打ち際に葬られており、墓石の墓碑銘に、こう前後矛盾する文句が彫られていた。「不幸なる魂を失いし不幸なる骸（むくろ）ここに眠る、その名を尋ねることなかれ。疫病よ、生き残れる人非人どもを滅ぼしつくし、一人も逃すことなかれ」。「われタイモン、ここに眠る、世に在っては世の人間をことごとく憎みしものなり、去りがけに存分に呪いはすれど、歩みをとどめず早々に立ち去るものなり」⁴⁾。

この矛盾する部分について、「実は二行ずつ別々のものらしい。つまりどちらか一方をとって他方を捨てるつもりでいたのが、両方とも印刷されてしまったらしいのだ」⁵⁾と説明されている。その他にも、筋の通らぬところがあり、未完の戯曲と見る研究者もいる。そういう意味も含めて『トロイラスとクレシダ』『終わりよければすべてよし』『尺には尺を』とともに、問題劇に分類される作品である⁶⁾。

『資本論』のタイモン

『資本論』第1巻第3章「貨幣あるいは商品流通」第3節「貨幣」(a)項「蓄蔵貨幣」におけるシェイクスピア『アテネのタイモン』からの引用について、拙稿『『資本論』の沙翁引用—引用先と引用元の一覧—』において、引用先と引用元をほぼ次のように記した。

まず『資本論』における引用文とその邦訳を示す。「貨幣においては諸商品のあらゆる質的区別が消え去っているように、貨幣は貨幣でまた、徹底的な水平派として、あらゆる区別を消し去る」という本文文言に次のような註記(91)が添えられる。

〈„Gold! kostbar, flimmernd, rotes Gold!
Soviel hievon, macht schwarz weiß, häßlich schön;
Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
...Ihr Götter! warum dies? warum dies, Götter;
Ha! dies lockt Euch den Priester vom Altar;

3) 前掲、小田島訳書、143頁。

4) 前掲、小田島訳書、168-169頁。

5) 村上淑郎「解説」(前掲、小田島訳書、所収) 175頁。

6) 河合祥一郎『あらすじで読むシェイクスピア全作品』(祥伝社、2013年刊) 6頁、203頁。

Reißt Halbgenes'nen weg das Schlummerkissen;
Ja dieser rote Sklave löst und bindet
Geweihete Bande; segnet den Verfluchten;
Er macht den Aussatz lieblich; ehrt den Dieb,
Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Einfluß
Im Rat der Senatoren; dieser führt
Der überjähr'gen Witwe Freier zu;
...Verdammt Metall,
Gemeine Hure du der Menschen. “)。

(Shakespeare, „Timon of Athens“.)⁷⁾⁸⁾

この引用部分について、社会科学研究所・監修、資本論翻訳委員会・訳『資本論』で対応する邦訳を示すと、次のようになる。

〈金か！ 黄金色にきらきら輝く貴重な金貨だな！
……これだけの金があれば、黒を白に、醜を美に、
邪を正に、卑賤を高貴に、老いを若きに、
臆病を勇気に変えることもできよう。
……神々よ、どういうことだ、これは？ どうしてこれを？
これはあなたがたのそばから神官や信者たちを引き離し、
まだ大丈夫という病人の頭から枕を引きはがす代物だ。
この黄金色の奴隷めは、信仰の問題でも
人々を結合させたり離反させたりし、
呪われたやつらを祝福し、白癩（びやくらい）病みを崇拜させ、
盗賊を立身させて、元老院議員なみの爵位や権威や栄誉を与えるやつなのだ。
枯れしぼんだ古後家を再婚させるのもこいつだ、
……やい、罰当たりな土くれめ、
……売女（ばいた）め〕
(シェイクスピア『アテネのタイモン』(第四幕、第三場。小田島雄志訳、『シェイクスピア全集』V、
白水社、139ページ))⁹⁾。

7) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Kar Marx Friedrich Engels Werke, Band 23. (Dietz Verlag, Berlin, 1962. 18. Auflage 1993.) S.146.

8) 福留久大「『資本論』の沙翁引用—引用先と引用元の一覧」(九州大学経済学会『経済学研究』第83巻第2・3合併号、2017年9月刊、所収) 64頁、同稿につき、以下では、拙稿「一覧」と略記する。同所には、〈マルクスは、シェイクスピア劇の台詞は独逸語翻訳し、作品名のみは英語そのまま引用している。〉と註記を付した。後述のように、マルクスが「シェイクスピア劇の台詞を独逸語翻訳し」た事実はないので、この註記については訂正が必要である。

この邦訳は、『資本論』の引用文を翻訳したわけではなく、小田島翻訳の該当箇所を適宜引用したものである。それゆえ、『資本論』の引用部分と照合すると、少なくとも三か所に不一致ないし疑問が生じている。したがって、厳密に言えば、そこは誤訳と言われてもやむを得ないところである。

- ①〈Soviel hievon, macht schwarz weiß, häßlich schön; Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.〉を日本語に移すと、こうなる。「これだけの金があれば、黒を白に、醜を美に、邪を正に、老いを若さに、臆病を勇気に、卑賤を高貴に、変えることもできる」。つまり、「卑賤を高貴に」が『資本論』引用文では最後に登場するのに対して、小田島訳では後から三番目に書かれているのである。
- ②〈Ja dieser rote Sklave löst und bindet Geweihte Bande;〉を日本語に移すと、こうなる。「この黄金色の奴隷めは、信仰の絆を引き離したり結び合わせたりする」。極めて小さいことながら、『資本論』の引用文では、「引き離す＝離反」が「結び合わす＝結合」より先になっていて、小田島訳と順番が入れ替わっているのである。
- ③〈Verdammt Metall〉は「罰当たりの金属め」を意味するので、小田島訳の「罰当たりな土くれめ」と対比すると、「金属」と「土」の違いが生じている。

シェイクスピアの原文

こういう不一致に気付いた時点で、引用元のシェイクスピア原文を点検してみる。『資本論』への引用で省略されている部分は（ ）を付している。

Gold? yellow, glittering, precious gold? (No, gods,
I am no idle votarist: roots, you clear heavens!))
Thus much of this will make black white, foul fair,
Wrong right, base noble, old young, coward valiant,
Ha, you gods! why this? what this, you gods?
Why, this
Will lug your priests and servants from your sides,
Pluck stout men's pillows from below their heads :
This yellow slave
Will knit and break religions, bless the accursed,
Make the hoar leprosy adored, place thieves
And give them title, knee and approbation
With senators on the bench: this is it
That makes the wappen'd widow wed again;

9) 社会科学研究所・監修、資本論翻訳委員会・訳『資本論』第一巻a(新日本出版社、1997年刊)222-223頁。「翻訳にあたっては、ドイツ語エンゲルス版を主たる底本としてドイツ語各版のほか、マルクス校閲の第一巻フランス語版、エンゲルス校閲の第一巻英語版、その他各国語版を参照の上、訳出した」(I頁)とされている。

《She, whom the spital-house and ulcerous sores
Would cast the gorge at, this embalms and spices
To the April day again.》 Come, damned earth,
Thou common whore of mankind, 《that put'st odds
Among the rout of nations,》

〈黄金（きん）？ 黄色い、ぎらぎらする、貴重な黄金（きん）じゃないか？

《いやいや、神様たち、わしは好い加減な祈りをしてるんじゃない。根を下さいよ！》

だが、こいつが此ッ位ありゃ、黒も白に、醜も美に、

邪も正に、賤も貴に、老も若（にやく）に、怯（けふ）も勇に変へることが出来る。

え！ 神様たち、何と、どうです？ はい、神様たち、どうです？ これが此ッ位ありゃ、

神官共だらうが、お傍仕への御家来だらうが、みんな余所へ引ッばってゆかれてしまひますぞ。

まだ大丈夫といふ病人の頭の下から枕を引ッこぬいてゆきますぞ。

此黄色い奴めは信仰を編み上げもすりゃ引きちぎりもする。

忌（いま）はしい奴を有りがたい男にもする。白癩（びやくらい）病みをも拝ませる。

盗賊（どろぼう）にも地位や爵や膝や名誉を元老並に与へる。

古後家（ふるごけ）を再縁させるのもこいつだ。

《癩病病院の患者だって嘔吐を催しさうな女でも、此香油を身に塗りゃア

四月の花のやうになる》。……やい、うぬ、罰当たりの土塊（つちくれ）め、

《どの人間をも魅惑して、諸国の無頼漢（ごろつき）の争鬪種（けんかたね）を蒔く》淫売め、》

《*Timon of Athens*, Act4 Scene3》。¹⁰⁾¹¹⁾

『資本論』の引用文とシェイクスピアの原文を照合すると、前節で指摘した不一致点三つに加えて、なお二つ小さな不一致点が見出されて、少なくとも五点の不一致を指摘できる。

①『資本論』では、〈Soviel hievon, macht schwarz weiß, häßlich schön; Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.〉「これだけの金があれば、黒を白に、醜を美に、邪を正に、老いを若きに、臆病を勇気に、卑賤を高貴に、変えることもできる」。つまり、「卑賤を高貴に」が『資本論』引用文では最後に登場するのに対して、シェイクスピア原文では、〈Thus much of this will make black white, foul fair, Wrong right, base noble, old young, coward valiant,〉となっており、「賤も貴に」は後から三番目に書かれているのである。

10) シェイクスピア著・坪内逍遙訳『ザ・シェイクスピア—全戯曲（全原文+全訳）』（第三書館、1989年刊）923頁

11) 拙稿「一覽」75-76頁。同所に、次のような註記を付している。その註記は、一部訂正の上、今も有効である。〈最終行の“Thou common whore of mankind”、『資本論』の翻訳では、“Gemeine Hure du der Menschen”という部分について。英語のwhore、ドイツ語のHureは「売春婦、淫売」を意味する。多くの『資本論』訳書で、シェイクスピアで言えば、“Thou common ~ of mankind”、『資本論』では、“Gemeine ~ du der Menschen”、つまり、「人間の共通の~」の部分は翻訳されないままである。事柄は、貨幣金に関わるだけに、訳出されてよいのではないかと考えられる。〈マルクスの翻訳〉〈マルクスでは〉の部分、〈『資本論』の翻訳〉〈『資本論』では〉と訂正した。

- ②『資本論』では、〈Ja dieser rote Sklave löst und bindet Geweihte Bande;〉「この黄金色の奴隷めは、信仰の絆を引き離したり結び合わせたりする」と、「引き離す＝離反」が「結び合わす＝結合」より先になっている。シェイクスピア原文では、〈This yellow slave Will knit and break religions,〉となっており、「信仰を編み上げもすりゃ引きちぎりもする」という具合に、「編み上げ＝結合」が「引きちぎり＝離反」に先行して、『資本論』引用文の場合と順番が入れ替わっているのである。
- ③『資本論』では、〈Verdammt Metall〉「罰当たりの金属」となっており、シェイクスピア原文の〈damned earth〉「罰当たりの土塊」と異なる。
- ④『資本論』では、〈„Gold! kostbar, flimmernd, rotes Gold!〉という具合に、感嘆符が付けられている。シェイクスピア原文では、〈Gold? yellow, glittering, precious gold?〉というように、疑問符がついている。ごく小さいことながら、不一致であることには変わりない¹²⁾。
- ⑤シェイクスピア原文の〈yellow, glittering, precious gold〉と『資本論』引用の〈kostbar, flimmernd, rotes Gold〉を対比すると、語順の違いは措くとして、〈glittering=flimmernd〉と〈precious=kostbar〉については、意味の一致が認められる。しかし、〈yellow gold〉「黄色の金」という英語が〈rotes Gold〉「赤い金」という独逸語に翻訳されていることには、注意が必要である。¹³⁾

『資本論』邦訳の作法

『アテネのタイモン』からの『資本論』への引用文とその日本語訳との間に、先述のような不一致が存在することに気付いた時点で、その他の邦訳書を点検してみる必要が生じた。当該個所の日本語翻訳を列挙してみる。

- (1) 高島素之・訳。 〈金！ 黄色な、キラキラと光り輝く貴き金！
それのみにて、黒は白となり、醜は美となり、
邪は正に、賤しきは気高く、老いたるは若く、怯者は勇者となる。…
……神々よ、これは何…何故にこれは
汝等の祭司と下僕とを汝等の側より引き離し、
逞しき人々の枕をその頭の下より挽ぎ取る。
この黄色な奴隷めは、
諸々の宗教（をしえ）を縫っては破り、咀はれたるを祝福し、

12) シェイクスピア原文では疑問符であるものが、『資本論』引用では感嘆符になっている点について。註記(9)として示された小田島翻訳では、感嘆符になっており、『資本論』引用と一致した形になっている。しかし、実際的小田島翻訳では、シェイクスピア原文通り、疑問符がついている。この部分のみ、『資本論』翻訳者（「資本論翻訳委員会」）により、改変されたと考えられる。

13) 恒吉法海教授（ドイツ文学専攻）の教示によると、ドイツ語の〈gelb〉「黄色い」は、嫉妬など高尚でない気持ちを表現することが多いために、〈Gold〉「黄金・金」を形容するのに相応しくないと考えられる傾向がドイツ文化に存在する。ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）には、〈Du rotes Gold〉「赤い黄金・金」という表現がある。ゲーテが使えば、「神の言葉」である。〈Du rotes Gold, das ohne Rast, Quecksilber gleich, dir in der Hand zerrinnt, (Johann Wolfgang Goethe: *Faust*. Der Tragödie Erster Teil. 1679-1680). 「水銀のやうにころころと、間断なく手のうちで散る赤い金か」。ゲーテ作森林太郎訳『ファウスト』第一部（岩波文庫、1928年刊）95頁。

白き癩者を崇めしめ、盗人らを坐せしめて、
 彼等に位を與へ、跪き讃む。
 座席に連なる元老議員と共に。これぞ
 悲しむ寡婦を再び嫁がしむる者。…
 忌々しき現世（うつしよ）、
 汝、人類共通の娼婦（はしため）。(シェークスピア『アゼンの隠者』)¹⁴⁾

この高島訳の末尾には、註記(61)という番号が記されている。その註記(61)を見ると、〈Shakespeare, Timon of Athens〉と出典が記されているだけで、誰か他の人の翻訳からの引用であるか、高島自身が翻訳したのかは不明である。

その上で、この訳文を『資本論』引用及びシェイクスピア原文と対比すると、「賤しきは気高く」が「老いたるは若く、怯者は勇者となる」より先行していること、「宗教（をしえ）を縫っては破り」というように「縫って=結合」が「破り=離反」に先行してこと、「赤い金」でなく「黄色の金」となっていること、この三点はシェイクスピア原文に即していることを物語る。ただ、最初の行の「金！黄色な、キラキラと光り輝く貴き金！」という部分で、疑問符でなく感嘆符がついていることだけが『資本論』引用と一致している。こうして総合的判断としては、シェイクスピア原文を翻訳しつつ、冒頭の一行の感嘆符のみ『資本論』引用に従って改変した、と考えられることになる。なお、『資本論』では、〈Verdammt Metall〉「罰当たりの金属」となっており、シェイクスピア原文の〈damned earth〉「罰当たりの土塊」と異なる点については、訳文から消去されている。

(二) 長谷部文雄・訳

〈黄金（きん）？ 黄色い、ぎらぎらする、貴重な黄金（きん）じゃないか？
 ……こいつが此ッ位いありゃ、黒も白に、醜も美に、
 邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることが出来る。
 ……神たち、何とどうです？ これが此ッ位いありゃ、
 神官共だろうが、お傍仕えの御家来だろうが、
 みんな余所へ引ッばってゆかれてしまいますぞ。
 まだ大丈夫という病人の頭の下から枕を引ッこぬいてゆきますぞ。
 この黄色い奴めは、信仰を編み上げもすりゃ引きちぎりもする。
 忌しい奴を有りがたい男にもする。白癩病みをも拝ませる。
 盗賊にも地位や爵や膝や名誉を元老なみに与える。
 古後家を再縁させるのもこいつだ。……やい、うぬ、罰当たりの土くれめ、
 ……淫売め……

14) 高島素之訳『資本論』第一巻第一冊（改造社、1927年刊）101-102頁。

シェークスピア『アセンズのタイモン』 [第四幕第三場、坪内逍遙訳による]。)¹⁵⁾

長谷部文雄訳『資本論』について、「本訳書のテキストは、モスクワのM・E・Lインスティテュート出版のドイツ語大衆版（1932-34年）である」とされている¹⁶⁾。

上掲の訳文については、坪内逍遙訳からの引用であることが明記されている。そして、註記（10）として示した坪内訳文と、当然のことながら、仮名遣いなど微細な変更を除けば、一致している。その結果、『資本論』引用文とシェイクスピア原文との対比において、「賤も貴に」が「老も若に、怯も勇に」に先立つこと、「編み上げ=結合」が「引きちぎり=分離」に先行すること、冒頭行に感嘆符でなく疑問符が使われていること、「赤い金」でなく「黄色い金」になっていること、「金属」でなく「土塊」になっていること、この五点はすべてシェイクスピア原文に即していると言える。ということは、この訳文は『資本論』引用文の翻訳ではないことを意味している。

（三）向坂逸郎・訳

〈黄金？ 黄色い、ざらざらする、貴重な黄金じゃないか？

こいつが此のくらいありゃ黒も白に、醜も美に、邪も正に、
賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることが出来る。

え！神様たち！ 何と神官共だろうが、お傍仕えの御家来だろうが、
みんな余所へ引ッぱってゆかれてしまいますぞ。

まだ大丈夫という病人の頭の下から枕を引っこぬいてゆきますぞ。

此黄色い奴めは信仰を編み上げもすりゃ引きちぎりもする。

忌しい奴を有りがたい男にもする。白癩病みをも拝ませる。

盗賊にも地位や爵や膝や名誉を元老並に与える。

古後家を再縁させるのもこいつだ。やい、うぬ、罰当たりの土塊め、

どの人間をも魅惑して、諸国の無頼漢の争鬪種（けんかだね）を蒔く淫売め……

[中央公論社、新修シェークスピア全集、第33巻『アセンズのタイモン』

(坪内逍遙訳) 130頁10行-132頁2行による]。)¹⁷⁾

向坂逸郎訳『資本論』については、「この邦訳は、まずマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版によって行われ、原本初版から三版、エンゲルス版、カウツキー版、二種の英訳及び二種の仏訳等が参照された」と記されている¹⁸⁾。

向坂訳書は、長谷部訳書と同様に、底本もマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版、シェイクス

15) 長谷部文雄訳『資本論』第一部第一分冊（青木書店、1952年刊）262頁。

16) 長谷部訳書、「訳者はしがき、7頁」。

17) 向坂逸郎訳『資本論』第一巻第一分冊（岩波書店、1947年刊）248頁。

18) 向坂訳書、278-279頁。

ピア原文の邦訳も坪内逍遙訳である。同じ坪内訳でも、漢字と仮名の使い分け、送り仮名の付け方など、些細な違いはあるが、問題とするに足るものではない。それ故に長谷部訳書と同様に、「賤も貴に」が「老も若に、怯も勇に」に先立つこと、「編み上げ=結合」が「引きちぎり=分離」に先行すること、冒頭行に感嘆符でなく疑問符が使われていること、「赤い金」でなく「黄色い金」になっていること、「金属」でなく「土塊」になっていること、この五点はすべてシェイクスピア原文に即している。したがって、この訳文は『資本論』引用文の翻訳ではないことになる。加えて、長谷部訳書では『資本論』引用文において省かれた部分「どの人間をも魅惑して、諸国の無頼漢の争闘種（けんかだね）を蒔く」は、注意深く引用において省略されているが、向坂訳書では、不注意のままに、この余計な部分までが引用される結果になっている。

(四) 岡崎次郎・訳

岡崎次郎訳『資本論』（大月書店）は、「ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編集『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集、第23－25巻』、ディーツ社発行、ベルリン、1962－64年」を底本としている¹⁹⁾。長谷部訳書や向坂訳書が、モスクワのM・E・L研究所版を底本としたのに対して、より新しいベルリンのM・L研究所版に依っているが、基本的に内容は同一だとみてよい。そのうえで、当該引用部分は、向坂訳書と同様に「中央公論社、坪内訳、130－132頁」からである²⁰⁾。という次第で、特徴は向坂訳書と同一である。ただ、『資本論』引用文に含まれていない部分「どの人間をも魅惑して、諸国の無頼漢の争闘種（けんかだね）を蒔く」は、注意深く省かれている。

(五) 宮川實・訳

宮川實訳『資本論』（あゆみ出版）は、底本も、当該引用部分も（岡崎訳書で「ギラギラする」という片仮名が「ぎらぎらする」と平仮名であるという細かい違いを別として）、岡崎訳書と基本的に同じである²¹⁾。したがって、特徴も同じである。

(六) 今村仁司・三島憲一・鈴木直・訳

〈金か？ 黄色い、きらきらした、貴重な金じゃないか？

……だが、こいつも、これくらいあれば、黒を白に、醜を美に、

邪を正に、賤を貴に、老を若に、怯を勇に変えるだろう。

おや、これはどうだ！なぜこんなものを？ 神々よ、どうせよとてこんなものを？

いやはや、これだけあれば、あなたがたのおそばから、

神官や召使どもを引っぱって行ってしまいますぞ。

19) 岡崎次郎訳『資本論』第一巻第一分冊（大月書店、1972年刊）3頁。

20) 岡崎訳書、233頁。

21) 宮川實訳『資本論』第一巻第一分冊（あゆみ出版、1977年刊）1頁、187頁。

まだ大丈夫と言える病人の頭の下からだって、その枕を引っこぬいてしまいますぞ。
この黄色いやつらは、宗教の面でも人々を結合させたり離散させたりするだろうし、
のろわれたやつらを祝福し、びゃくらい病みをあがめさせ、
泥棒を高官に登用して、やつらに元老なみの爵位や権威や名誉を与えるだろう。
古後家を再婚させるのもこいつだ。
……さあ、ばち当りな土め、人間どもを誘惑して
[諸国の暴民どものあいだに争いをおこす] 売女め！……>
(シェイクスピア『アセンズのタイモン』第四幕第三場。
[八木毅訳、『シェイクスピア全集』8、筑摩書房、183ページ。]²²⁾

今村・三島・鈴木・訳書の底本は Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 23, Dietz Verlag, Berlin, 1962である²³⁾。岡崎訳書や宮川訳書と同一である。当該の『資本論』引用文の翻訳についてみると、他の邦訳書と異なり、シェイクスピア原文の八木毅訳の引用に依っている点新しい。『資本論』引用文の今村・三島・鈴木による翻訳ではないために、「賤を貴に」が「老を若に、怯を勇に」に先立つこと、「結合させたり＝結合」が「離散させたり＝分離」に先行すること、冒頭行に感嘆符でなく疑問符が使われていること、「赤い金」でなく「黄色い金」になっていること、「金属」でなく「土」になっていること、この五点はすべてシェイクスピア原文に即しており、当然のことながら、この訳文は『資本論』引用文の翻訳ではないわけである。さらに、「人間どもを誘惑して [諸国の暴民どものあいだに争いをおこす]」という文章は、『資本論』引用文においては省略されている部分である。何故にこの部分が引用されたのか、理解に苦しむところである。

(七) 中山元・訳

中山元訳『資本論』（日経 BP 社）については、翻訳の底本は Werke, Band 23, Dietz Verlag, 1962であり、当該『資本論』引用文の翻訳は八木毅訳の引用である、というように、今村・三島・鈴木・訳書と同じである²⁴⁾。したがって、特徴も同じということになる。違いは、「人間どもを誘惑して、諸国の暴民どものあいだに争いをおこす」という不要の部分が適切に除去されていることだけである。

『資本論』邦訳書における『アテネのタイモン』引用を点検すると、すべての邦訳において、『資本論』の引用文を翻訳するのではなくて、シェイクスピア原文の翻訳の引用であることが判明する。

22) 今村仁司・三島憲一・鈴木直・訳『資本論』第一巻上（筑摩書房、2005年刊）196頁。

23) 今村・三島・鈴木・訳書、「第一巻 凡例」。

24) 中山元訳『資本論』第一巻 I、凡例及び292-293頁。

『経哲草稿』の引用文

『アテネのタイモン』からのマルクスの同一個所の引用は、『1844年の経済学・哲学草稿』（*Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*）においても見出される。『資本論』に引用された部分が少しだけ詳しく引用されているだけでなく、同じ第四幕第三場の別の場面からの引用もあり、加えてマルクスのシェイクスピア評価、貨幣の力への言及も書き込まれている。『資本論』に引用された台詞を点検すると、すべての邦訳において、『資本論』の引用文を翻訳するのではなくて、シェイクスピア原文の翻訳の引用であることが判明する。『1844年の経済学・哲学草稿』（以下、『経哲草稿』の略語を用いる）における『アテネのタイモン』からのマルクスの引用については、『資本論』の場合とは反対に、シェイクスピア原作とは独立に、『経哲草稿』への引用文そのものが翻訳されている。そのことを確認するために、『アテネのタイモン』からの引用部分とそれに続くシェイクスピアの貨幣論評価の部分とを示すと、次の通りである。

〈Shakespeare im „Timon von Athen“:

„Gold? Kostbar, flimmernd, rotes Gold? Nein, Götter!

Nicht eitel fleht'ich.

So viel hievon macht schwarz weiß, häßlich schön;

Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.

Dies lockt ... den Priester vom Altar;

Reißt Halbgenesnen weg das Schlummerkissen:

Ja, dieser rote Sklave löst und bindet

Geweihte Bande; segnet den Verfluchten;

Er macht den Aussatz lieblich, ehrt den Dieb

Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Einfluß

Im Rat der Senatoren; dieser führt

Der überjähr'gen Witwe Freier zu;

Sie, von Spital und Wunden giftig eiternd,

Mit Ekel fortgeschickt, verjüngt balsamisch

Zu Maienjugend dies. Verdammt Metall,

Gemeine Hure du der Menschen, die

Die Völker tört”

Und weiter unten:

„Du süßer Königsmörder, edle Scheidung

Des Sohns und Vaters! glänzender Besudler

Von Hymens reinstem Lager! tapfrer Mars!

Du ewig blüh'nder, zartgeliebter Freier,
Des roter Schein den heil'gen Schnee zerschmelzt
Auf Dianas reinem Schoß! *sichtbare Gottheit*,
Die du *Unmöglichkeiten* eng verbrüderst,
Zum Kuß sie zwingst! du sprichst in jeder Sprache,
Zu jedem Zweck! o du, der Herzen Prüfstein!
Denk, es empört dein Sklave sich, der Mensch!
Vernichte deine Kraft sie all verwirrend,
Daß Tieren wird die Herrschaft dieser Welt!"

Shakespeare schildert das Wesen des *Geldes* trefflich.

.....

Shakespeare hebt an dem Geld besonders 2 Eigenschaften heraus:

1. Es ist die sichtbare Gottheit, die Verwandlung aller menschlichen und natürlichen Eigenschaften in ihr Gegenteil, die allgemeine Verwechslung und Verkehrung der Dinge; es verbrüdert Unmöglichkeiten;
2. Es ist die allgemeine Hure, der allgemeine Kuppler der Menschen und Völker.)²⁵⁾

上記ドイツ語引用文とシェイクスピア評価に対応する邦訳を真下信一訳で示すと、次の通りである。
(シェイクスピアは『アテナイのティモン』のなかでこう言っている。

「金（かね）か？ 結構な、ぴかぴかの黄金（こがね）か？
いや神々さまだ！ わしはだてにお祈りするわけじゃない。
これだけそいつがあれば黒も白、醜も美、
不良も良、老も若、儒も勇、賤も貴だ。
そいつは……祭司を祭壇から誘うし、
なおりかけの病人から寝枕をひっこぬく。
そうだ、この黄金色の奴隷めは神聖な絆を
解いたり結んだり、呪われた者の呪いを払ったりする。
そいつ奴のおかげで癩病もかわいくなり、
盗人（ぬすっと）は崇められて、元老院での地位と威光と権勢を手に入れる。
そいつ奴は、くたびれた年増やもめに求婚者を連れてくる。
養老院から毒々しい傷の膿で、反吐（へど）はくように放り出された女を、
こいつは芳しく五月（さつき）の若さへよみがえらせる。

25) Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, Kar Marx Friedrich Engels Werke, Band. 40 (Dietz Verlag, Berlin, 1985.) S.563-564. 565. 「1844年4月から8月の間に書かれたマルクスの手書き原稿に基づく (Nach der Handschrift)」とされている (S.466)。

いまましい金属め、きさまは人々を誑（たぶ）らかす
人類共同の娼婦だ。」

そしてもっと後のほうでは、

「こやつ、かわいい王様殺し奴（め）

息子と父の高価な縁切り！

ヒュメナイオス [婚礼の神] の至純の臥所（ふしど）の絢爛たる冒涇者！

勇ましいマルス [軍神] ！

この永久（とわ）に栄えるいとしの求婚者、

その金色の輝きはディアナ [貞操の女神] の淨い膝の聖なる雪をも溶かす！

目に見える神、お前は不可能事どもを密に睦ませ、否応なしに口づけさせる！

お前はどんな言語（ことば）でも、どんな目的のためにでも、語る！

おおこやつ、人々の心の試金石奴（め）！

お前の奴隷である人間が背くことを思ってみるがよい！

お前の力で彼らすべてを掻き乱して滅ぼしてしまえ！

そうすりゃ、この世の支配は獣どものものだ！」

シェークスピアは金（かね）の本質を的確に描いている。

……

シェークスピアは金においてとくに二つの属性を取り出している。

- (一)、それは目に見える神であり、あらゆる人間のおよび自然的諸属性の、それらの反対物への転化であり、諸事物の普遍的な混同と転倒であり、それはもろもろの不可能事を睦み合わせる。
- (二)、それは人間たちと諸国民との普遍的娼婦、普遍的取持役である。²⁶⁾

『経哲草稿』におけるタイモン関連の引用文の邦訳で特徴的なことは、『経哲草稿』の引用文そのものを翻訳していることである。二つの引用文のうち前者について見ると、シェイクスピア原文と比較して、次の四点で不一致が生じている。①「賤も貴だ」が「老も若、懦も勇」の後にまわっていること、②「解いたり＝分離」が「結んだり＝結合」に先行していること、③シェイクスピア原作の〈the April day〉「四月の日」が『経哲草稿』引用文では〈Maienjugend〉「五月の若さ」に変えられていること、④「罰当たりの土塊め」が「いまましい金属め」に変じていること、この四点は、シェイクスピア原文を離れて、『経哲草稿』のドイツ語引用文に即している。その点で『資本論』のドイツ語引用文の扱いと反対の結果になっている。『資本論』の引用文で問題となった冒頭行における感嘆符か疑問符かの違いは、『経哲草稿』の場合、シェイクスピア原文と同様に疑問符が使われているので、問題は生じない。シェイクスピア原文の〈yellow gold〉「黄色の金」が『経哲草稿』の引用文で〈rotes Gold〉

26) 真下信一訳『1844年の経済学・哲学草稿』（マルクス＝エンゲルス全集第40巻、所収。大月書店、1975年刊）485-486頁、486-487頁。

「赤い金」と翻訳されている点については、真下訳文では「黄金（こがね）」と邦訳されたために判然としない結果になっている。

その点で注目されるのは、城塚登・田中吉六・訳『経済学・哲学草稿』（岩波文庫、1964年刊）である。そこでは、当該箇所が「黄色い黄金」と邦訳されたうえで、次の註記が施されている。〈マルクスは独訳（A. W. von Schlegel, L. Tieck 共訳）から引用している。そのため、シェークスピアの原文では「黄色い」yellow となっているところが、「赤い」rot と書かれている。もっともドイツ語で rot という形容詞は、必ずしも「赤い」という意味だけもっているのではなく、とくにこの当時は「黄金色」「赤茶色」をも意味することがあった。〉²⁷⁾

因みに、他の特徴を見ると、「黒も白に、醜も美に、悪も善に、老も若に、臆病も勇敢に、卑賤も高貴にかえる」という邦訳、「解きもすれば結びもする」という邦訳、「呪われた金属め」という邦訳、「五月の緑のように若返らせる」という邦訳になっていることからドイツ語引用文に即していることが判明する。

シェイクスピア原文に即しているか、ドイツ語引用文に即しているか、この問題を巡って興味深い邦訳は、エーリッヒ・フロム著、樺俊雄・石川康子・訳『マルクスの人間観、付 経済学・哲学草稿』（合同出版、1970年刊）である。原著 Erich Fromm, *Marx's Concept of Man, With a translation from Marx's Economic and Philosophical Manuscripts* by T. B. Bottomore, 1961は英文著作であるから、『アテネのタイモン』からの引用部分は、ドイツ語引用文を離れてシェイクスピア原文の引用に変えられている。それに対して樺・石川の邦訳文は、特異な作法を示している。『資本論』の向坂訳書や岡崎訳書と同じように「シェイクスピア『アテネのタイモン』*Timon of Athens* 坪内逍遙訳より。中央公論社版、130-132頁」と引用元を示しながら、実際には次のように『経哲草稿』のドイツ語引用文に即した邦訳を掲げている。冒頭行でこそ「山吹き色」＝「黄色」とシェイクスピア原文に従っているが、その他では、「賤も貴に」が「老も若に、怯も勇に」より後に置かれていること、「きずなをときもすればむすびもする」と「分離」が「結合」に先行していること、「土塊」が「金物」に変わっていることなどから判断して、『経哲草稿』のドイツ語引用文に即した邦訳が施されていることが判明する。なお、〈the April day〉「四月の日」と〈Maienjugend〉「五月の若さ」との間の違いは「花かんばしい乙女」と訳される形で解消されている。

〈シェイクスピアは『アテナイのタイモン』のなかでいう、

「黄金？ 高価な、ざらざらする、山吹き色の黄金？

いや、神々たち！ わたしがおねがいはするのむりはない。

こいつがこれぐらいあれば、黒も白に、醜も美に、

邪も正に、老も若に、怯も勇に、賤も貴にかえることができる。

こいつは……坊主を祭壇からおびきだす。

27) 城塚登・田中吉六・訳『経済学・哲学草稿』（岩波文庫、1964年刊）180頁、280-281頁。

なおりかけの病人の頭のしたから、枕をふんだくりもする。
 いや、まったくこの山吹き色の奴隷は、
 信仰のきずなをときもすれば、むすびもする。
 いまわしい畜生をありがたい男にもする。
 らい病やみをこいしがらせ、泥棒に名誉を、地位を、権力をあたえて、
 元老なみに奴をおがませもする。
 ふる後家を再縁させるのもこやつだ。
 傷口にうみをためながら、へどといっしょに病院からおいだされたげすな女を、
 花かんばしい乙女に若がえらせるのもこやつだ。
 うぬ、ばちあたりな金物め、人間どもをしれものにかえる、
 げびた売女（ばいた）こそきさまだ。』²⁸⁾

『経済学・哲学草稿』については、城塚登・田中吉六・訳（1964年刊）、樺俊雄・石川康子・訳（1970年刊）、真下信一訳（1975年刊）のほかに、二一世紀にはいって長谷川宏訳『経済学・哲学草稿』（光文社古典新訳文庫、2010年刊）を読むことが出来た。『アテネのタイモン』からの引用をその第一について見ると、「黒を白に、醜を美に、悪を善に、老いを若さに、卑怯者を勇者に、賤民を貴族に変えられる」と「賤を貴に」が最後に置かれていること、「信仰の絆を解いたり結んだり」と「分離」が「結合」に先行していること、「いまましい金属め」と「土塊」が「金属」に変わっていること、この三点で、シェイクスピア原文から離れて、ドイツ語引用文の翻訳であることが判る。「黄色い金」か「赤い金」かの違いは「黄金色（こがねいろ）」という表現で、「四月の日」と「五月の若さ」との相異は「華やぐ乙女」という訳語で、解消されている²⁹⁾。

こうしてみると、『経哲草稿』の邦訳者は、シェイクスピア原文に依るのではなくて、『経哲草稿』のドイツ語引用文を翻訳していることが明確になる。その点で、『資本論』邦訳者がシェイクスピア原文の翻訳に頼り、ドイツ語引用文を離れて誤訳の過ちに陥ったのとは、正反対の作法を示している、と言える。

ティーク父と娘の翻訳

現行『資本論』における『アテネのタイモン』からの引用は、前出の註記（7）として示した通りである。その引用文の末尾に（Shakespeare, „Timon of Athens“.) と出典が記されているだけであって、該当する引用文のドイツ語翻訳については何も言及がない。『経哲草稿』における引用は、前出の註記

28) エーリッヒ・フロム著、樺俊雄・石川康子・訳『マルクスの人間観、付 経済学・哲学草稿』（合同出版、1970年刊）197-198頁、240頁。Erich Fromm, *Marx's Concept of Man, With a translation from Marx's Economic and Philosophical Manuscripts* by T. B. Bottomore, (Frederick Ungar Publishing Co. New York, 1961) p.165.

29) 長谷川宏訳『経済学・哲学草稿』（光文社古典新訳文庫、2010年刊）243-244頁。

(25) として示した通りである。こちらには、引用文末尾に註記番号 (129) が付けられているが、註記 (129) を見ると、記されているのは、〈Shakespeare, „*Timon von Athen*“, 4. Akt, 3. Szene.〉と、シェイクスピア作品の引用元のみであり、該当する引用文のドイツ語翻訳については何も言及がない³⁰⁾。

しかし、『経哲草稿』の場合には、前述の城塚・田中訳書に「マルクスは独訳 (A. W. von Schlegel, L. Tieck 共訳) から引用している」と記されていたように、幾つかの版本でドイツ語引用文についての情報が与えられている。Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte, geschrieben von April bis August 1844, Nach der Handschrift*, (Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig, 1968) では、当該引用文に付された註記に〈nach der Übersetzung von Tieck-Schlegel〉「ティークとシュレーゲルの翻訳に依る」と記されている³¹⁾。一層詳しくは Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA), Erste Abteilung, Band2, Werke · Artikel · Entwürfe März 1843 bis August 1844 *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* に含まれる『経哲草稿』の註記に In: Shakespeare's dramatische Werke. Uebersetzt von August Wilhelm von Schlegel, ergänzt und erläutert von Ludwig Tieck. Th.7. Berlin 1832. S.217 und 227. 「August Wilhelm von Schlegel によって翻訳され、Ludwig Tieck によって補足され注釈が加えられたシェイクスピア戯曲集に含まれている」旨が記されている³²⁾。

他方、『経哲草稿』の英語翻訳書では、Erich Fromm, *Marx's Concept of Man, With a translation from Marx's Economic and Philosophical Manuscripts* by T. B. Bottomore, (1961) の『アテネのタイモン』からの引用文に〈Marx quotes from the Schlegel-Tieck translation.〉と翻訳者註記が付されている³³⁾。Karl Marx, *Economic & Philosophic Manuscripts of 1844*. Edited, with an Introduction by Dirk J. Struik, Translated by Martin Milligan (1970) においては、『アテネのタイモン』からの引用文に〈Marx quotes the German translation by Dorothea Tieck; he quotes it again in *Capital*〉と翻訳者名を明記した註記が加えられている³⁴⁾。

『アテネのタイモン』のドイツ語翻訳には、父の Ludwig Tieck (1773–1853) と娘の Dorothea Tieck (1799–1841)、二人のティークが筆を振っていたわけである。しかも、親が先に他界する世間の通例に逆らって、ティーク親子の場合、娘が先に逝去しているために、『アテネのタイモン』のドイツ語翻訳者について、MEGA は父 Ludwig Tieck を指名し、Milligan は娘 Dorothea Tieck を名指しする混乱が生じたわけである。

九州大学図書館所蔵の William Shakespeare's Dramatische Werke には、父 Ludwig Tieck の翻訳と娘 Dorothea Tieck の翻訳が含まれている。『資本論』や『経哲草稿』に引用された部分を掲げると、①②のようである。①が父の作品³⁵⁾、②が娘の作品である³⁶⁾。

30) Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, Werke, Band. 40. S.675.

31) Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte, geschrieben von April bis August 1844, Nach der Handschrift*, (Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig, 1968) S.339.

32) Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA), Erste Abteilung, Band2, Werke · Artikel · Entwürfe, März 1843 bis August 1844. S.915.

33) Erick Fromm, *Marx's Concept of Man*, (1961). p.165.

34) Karl Marx, *Economic & Philosophic Manuscripts of 1844*. Edited, with an Introduction by Dirk J. Struik, Translated by Martin Milligan (Lawrence & Wishart Ltd, London, 1970). p.247.

①

Gold? kostbar, flimmernd, rotes Gold? Nein, Götter!
 Ich bin kein Götzendiener. Wurzeln, reiner Himmel!
 So viel hievon macht schwarz weiß, häßlich schön,
 Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
 Ihr Götter! warum dies? warum dies, Götter?
 Ha! dies lockt euch den Priester vom Altar,
 Reißt Halbgenes'nen weg das Schlummerkissen.
 Ja, dieser rote Sklave löst und bindet
 Geweihte Bande; segnet den Verfluchten.
 Er macht den Aussatz lieblich, ehrt den Dieb
 Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Einfluß
 Im Rat der Senatoren! dieser führt
 Der überjähr'gen Witwe Freier zu;
 Sie, von Spital und Wunden giftig eiternd,
 Mit Efel fortgeschickt, verjüngt balsamisch
 Zu Maidenjugend dies. Verdamnte Erde,
 Gemeine Hure du der Menschen, die
 Den Zwist ausschleudert in der Völker Schwarm,
 Mir sei du, was du bist.

②

Gold? kostbar, flimmernd, rotes Gold? Nein, Götter!
 Nicht eitel fleh' ich. Wurzeln, reiner Himmel!
 So viel hievon, macht schwarz weiß, häßlich schön;
 Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
 Ihr Götter! Warum dies? Warum dies, Götter;
 Ha! Dies lockt euch den Priester vom Altar;
 Reißt Lebenskräft'gen weg das Schlummerkissen.
 Ja, dieser rote Sklave löst und bindet
 Geweihte Bande, segnet den Verfluchten,
 Macht ehrwürdig den Aussatz, ehrt den Dieb
 Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Geltung
 Im Rat der Senatoren; dieser führt
 Der überjähr'gen Witwe Freier zu;
 Die selbst den Eiterchwären des Spitals
 Brechreiz erregte, läßt balsamisch duften,
 Wie Frühlingstag, das Gold. Verdamnte Erde,
 Gemeine Hure, die du Zwietracht stiftest
 Im Völkerjchwarm, ich lehr' dich deine Pflicht.

『資本論』と『経哲草稿』に引用された部分をFraktur「ひげ文字」からLateinschrift「ラテン文字」に移すと、次のようになる。

- ① „Gold? Kostbar, flimmernd, rotes Gold? Nein, Götter!
 Ich bin kein Götzendiener. Wurzeln, reiner Himmel !
 So viel hievon macht schwarz weiß, häßlich schön,
 Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
 Ihr Götter ! warum dies ? warum dies, Götter ?
 Ha ! dies lockt euch den Priester vom Altar,
 Reißt Halbgenes'nen weg das Schlummerkissen.

35) *Timon von Athen*. In: W. Shakespeare's Dramatische Werke. Uebersetzt von Augst Wilhelm von Schlegel und Ludwig Tieck. (Deutsche Verlags-Anstalt, 1891) S.546

36) *Timon von Athen*. In: Uebersetzt von Dorothea Tieck. Shakespeares sämtliche dramatische Werke in zwölf Bänden. Elfter Band. S.43-44.

Ja, dieser rote Sklave löst und bindet
Geweihete Bande; segnet den Verfluchten.
Er macht den Aussatz lieblich, ehrt den Dieb
Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Einfluß
Im Rat der Senatoren ! dieser führt
Der überjähr'gen Witwe Freier zu;
Sie, von Spital und Wunden giftig eiternd,
Mit Ekel fortgeschickt, verjüngt balsamisch
Zu Maienjugend dies. Verdammte Erde,
Gemeine Hure du der Menschen, die
Den Zwist ausschleudert in der Völker Schwarm,
Mir sei du, was du bist. “

- ② „Gold? Kostbar, flimmernd, rotes Gold? Nein, Götter!
Nicht eitel fleht' ich. Wurzeln, reiner Himmel !
So viel hievon, macht schwarz weiß, häßlich schön;
Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
Ihr Götter ! Warum dies ? Warum dies, Götter;
Ha ! Dies lockt euch den Priester vom Altar;
Reißt Lebenskräft'gen weg das Schlummerkissen.
Ja, dieser rote Sklave löst und bindet
Geweihete Bande, segnet den Verfluchten,
Macht ehrwürdig den Aussatz, ehrt den Dieb
Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Geltung
Im Rat der Senatoren ; dieser führt
Der überjähr'gen Witwe Freier zu;
Die selbst den Eiterschwären des Spitals
Brechreiz erregte, läßt balsamisch duften,
Wie Frühlingstag, das Gold. Verdammte Erde,
Gemeine Hure, die du der Zwietracht stiftest
Im Völkerschwarm, ich lehr' dich deine Splicht..“

このテーク父とテーク娘がドイツ語に翻訳した二つの文章を、註記(25)として示した『経哲草稿』への引用文と比較してみる。両作品の2行目は、父の場合〈Ich bin kein Götzendiener〉「私は決して偶像崇拝者ではない」、娘の場合〈Nicht eitel fleht' ich.〉「私はいい加減にお祈りしているわけではない」

となっていて、娘の文章と一致する。7行目は、父の場合〈Reißt Halbgenes'nen weg das Schlummerkissen.〉「半ば回復した人から枕を引っこ抜く」、娘の場合〈Reißt Lebenskräft'gen weg das Schlummerkissen〉「まだ丈夫な人から枕を引っこ抜く」であって、ここでは父の文章と一致する。10行目は、父親の文章が〈Er macht den Aussatz lieblich,〉「癩病やみを好きにさせる」、娘の文章が〈Macht ehrwürdig den Aussatz,〉「癩病やみに尊敬の念を抱かせる」で、わずかの違いながら父親の文章と一致している。父と娘の間で大きく異なるのは、14行から16行にかけてである。そして、父の文章が『経哲草稿』への引用文と一致している。16行目の父と娘の共通の文章〈Verdammte Erde,〉「呪われた土塊め」は、『経哲草稿』への引用文〈Verdammt Metall〉「呪われた金物め」と共に食い違っている。残りの部分については、〈Gemeine Hure〉「卑しい売女」の部分は、三者に共通ながら、その後の部分が三者三様に微妙に異なっている。

九州大学図書館所蔵の William Shakespeare's Dramatische Werke で見る限りでは、『経哲草稿』への引用文は、父 Ludwig Tieck の翻訳と多くの共通部分を含みながらも、不一致点も多くて、マルクスが筆写したのは、父の別の翻訳、娘 Dorothea Tieck の別の翻訳、父娘合作の別の作品、この三つの可能性が残ることになる。有力な候補は、MEGAが指示している Shakespeare's dramatische Werke. Uebersetzt von August Wilhelm von Schlegel, ergänzt und erläutert von Ludwig Tieck. Th.7. Berlin 1832. S.217 und 227. であるが、目下のところ確認の術がない状態である。

マルクスとカウツキー

二〇一九年、新年の幕開けまで、『資本論』と『経哲草稿』の『アテネのタイモン』からの引用は、版本をいずれかと特定できないまでも、父 Ludwig Tieck か、娘 Dorothea Tieck か、二人の共同訳か、そのいずれかであると考えていた。新年の読書初めに、『資本論』初版を紐解いていて、予想外の事態に遭遇した。マルクスは、『資本論』初版において、『アテネのタイモン』を、以下のようにシェイクスピア原文から引用していたのである。

„Gold ! yellow, glittering precious gold !
 Thus much of this, will make black white ; foul, fair ;
 Wrong, right; base, noble; old, young ; coward, valiant
 What this, you gods ! Why this
 Will lug your priests and servants from your sides ;
 Pluck stout men's pillows from below their heads.
 This yellow slave
 Will knit and break religions: bless the accurs'd;
 Make the hoar leprosy ador'd: place thieves
 And give them title, knee and approbation,

With senators of the bench. this is it,
That makes the wappen'd widow wed again
..... Come, damned earth,
Thou common whore of mankind.“

(Shakespeare. Timon of Athens)³⁷⁾

この文章を、シェイクスピア原文と照合すると、省略された文章、ador'd (adored), accurs'd (accursed) の如き文字の省略、句読点の付け方の違いを別にすれば、相異はただ二点、一つは、冒頭行でシェイクスピア原文で疑問符になっているところが感嘆符に変わっていること、二つは、11行目の senators of the bench が原文では senators on the bench であって、n となるべきところが f になっている所だけである。この二つ目の違いの原因は、マルクスの筆写の誤りか、植字工の手違いか、今は確かめようがないことである。

この状況は、第二版においても変わらない³⁸⁾。それにとどまらず、エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-1895) の死後、1903年に刊行された第五版においても、感嘆符と〈of〉の違いを残したまま、シェイクスピア原文の引用が続いている³⁹⁾。

それでは、いつ現行『資本論』のドイツ語訳による引用に変わったのか。確かめられる限りでは、1914年刊行のカウツキー (Karl Kautsky, 1854-1938) 編集の民衆版からである。マルクスは1883年に死去しているので、著作権が死後30年経過した1914年には解消され、マイスナー書店以外の出版社から自由に刊行が可能になった。その機会に社会民主党の幹部会がドイツ民衆に親しみやすい形での刊行をカウツキーに委嘱した。民衆版の読者は外国語に不案内であるという点から、英語の引用文はドイツ語に置き換えられることになった。その結果、『アテネのタイモン』からの引用は、次の形に改められたのである。そして、翻訳者名が Dorothea Tieck と明示されることになった。以下のドイツ語文章を、先に註記 (36) として示した娘 Dorothea Tieck の文章と対比するならば、冒頭行の疑問符が感嘆符に変えられていること、句読点の打ち方に違いが見られることを別にすると、両者が一致することを知り得るはずである。

„Gold! Kostbar, flimmernd rotes Gold! ...
So viel hievon macht schwarz weiß, häßlich schön,
Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
Ihr Götter! Warum dies? Warum dies, Götter;
Ha, dies lockt euch den Priester vom Altar;
Reißt Lebenskräft'gen weg das Schlummerkissen.

37) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, (Verlag von Otto Meissner. Hamburg. 1867) S.93.

38) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Zweite verbesserte Auflage. (Verlag von Otto Meissner. Hamburg. 1872.) S.113-114..

39) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Fünfte Auflage. Herausgegeben von Friedrich Engels. (Verlag von Otto Meissner. Hamburg. 1903.) S.95-96.

Ja, dieser rote Sklave löst und bindet
Geweihete Bande; segnet den Verfluchten,
Macht ehrwürdig den Aussatz, ehrt den Dieb
Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Geltung
Im Rat der Senatoren ; dieser führt
Der überjähr'gen Witwe Freier zu.
.....Verdammte Erde,
Gemeine Hure, die du der Zwietracht stiftest
Im Völkerschwarm, ...“

(*Shakespeare*: Timon von Athen.)

[IV. 3. Uebersetzung von Dorothea Tieck.⁴⁰⁾]

以上のように点検した結果、『資本論』第1巻第3章「貨幣あるいは商品流通」第3節「貨幣」(a)項「蓄蔵貨幣」における『アテネのタイモン』からの引用のTextとしては、マルクスが初版で引用したシェイクスピア原文のそれが最も適切であることが判明する。

ただし、次の二つの留保条件が不可欠である。一つ、ドイツ語引用符（最初の„と最後の“）を除いて、句読点はシェイクスピア原文のそれに復元すること。二つ、冒頭行でシェイクスピア原文で疑問符になっているところがマルクスでは感嘆符に変わっている点、11行目で原文では *senators on the bench* となっているところがマルクスでは *senators of the bench* に変わっている点について註記が付されるべきこと⁴¹⁾。

[九州大学名誉教授]

40) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Volksausgabe. Herausgegeben von Karl Kautsky. (J. H. W. Dietz. Stuttgart. 1914.) S.90.

41) 本稿作成に際して、ドイツ語文章の読解、シェイクスピア作品のドイツ語翻訳などの諸点について、恒吉法海教授（ドイツ文学専攻）の御教示を多く得ることができました。深く感謝申し上げます。言うまでもなく、有り得る誤りは筆者が責任を負うべきものです。